

解 答

更新講習会・講習内容の確認について

平成 28 年 7 月 20 日

登録番号		氏 名	
------	--	-----	--

1. 「診断と補強について」から、次のア～オの記述について正しいものには○、誤っているものには×を付けてください。

(ア)耐震診断とは、中小地震によって建物が損傷する可能性があるかどうかを判定することである。 大地震 (×)

(イ)屋根は石綿スレート板葺き、外壁、内壁とも土塗り壁だった住宅を、屋根が軽いため「軽い建物」として診断を行った。 重い (×)

(ウ)「診断専用」として扱う塗厚 50mm の土塗り壁を、補強部材として使用してはいけない。 (○)

(エ)三重県プログラムにおいては、1階鉄筋コンクリート造+2, 3階木造の3階建て混構造の住宅は適用範囲外である。 (○)

(オ)開口の有る壁は耐力壁でないため、耐力に算入してはいけない。 (×)

2. 「Q&A と判定会からの留意点について」から、次のア～オの記述について正しいものには○、誤っているものには×を付けてください。

(ア) 筋かい (L : 30×90 以上 シングル くぎ打ち) が存在している壁長が 600 mmであった為、筋かいの耐力を無視して診断を行った。 (○)

(イ) 2階建ての木造住宅で、壁端柱の柱頭・柱脚接合部の仕様について、ほぞ差しで構面の両端が通し柱となっていた為、1階のみ接合部Ⅲとした。 1. 2階ともⅢ (×)

(ウ) 910 mmの無開口壁に、同じ仕様で同一線上隣接した両端に本柱がある 455 mmの無開口壁が存在していた為、壁長を 1365 mmとして診断を行った。 (○)

(エ) 補強計画について、診断専用と記述されている耐力要素の面材を新たに使用する為、その面材の耐力を考慮して補強計画を行った。 補強材としては使用不可 (×)

(オ) 有開口壁について、評価できる開口部の壁長さは3 mを上限とする為、連続する長さ6 mの開口壁長の開口部は、3 mと3 mに分けて評価した。
合算入力 (×)

3.「補強の問題点と注意事項について」から、次のア～オの記述について正しいものには○、誤っているものには×を付けてください。

(ア) 無筋コンクリート造の基礎の上部に構造用合板(両面)及び45 x 90 筋違(両面)を併用し強固な壁を構築し、耐力の増加を図った。

強すぎる壁はNG (×)

(イ) 補強工事中に梁柱等の劣化が確認されたが、補強計画に記載されていないことから工事を現況のまま進めた。

(×)

(ウ) 45 x 90 筋違の金物取り付け時に引き抜き金物が規定を満足している場合、筋違金物にBP1.5は使用可能である。

BP2.0 (×)

(エ) 30 x 90 筋違に余裕をもってBP2.0を使用した場合、引き抜き金物の施工はしなくても良い。

引抜金物は必ず施工 (×)

(オ) 片面筋交い補強の場合、取り付け方向に関しては壁の耐力は変わらないので特に注意する必要は無い。

(×)

開始から15分が経過しましたら、司会者から案内がありますので、それに従いお帰り頂いても結構です。

その際用紙を裏向きにし退室してください。廊下にて受講票を示し修了証明書をお受け取りのうえ、お帰りください。

お忘れ物のないように、気を付けてお帰り下さい。本日は、お疲れ様でした。

考查時間内の退出は、

お静かにお願いいたします